

化粧が意識性に及ぼす効果の研究

早稲田大学人間科学部

春 木 豊

This study consists of two parts, namely Study I and II. In Study I, we studied how making up and removing it influence the mood of the person concerned. We also studied whether or not any difference is observed in the influence on mood by personality. The subjects were women's college students. We had those who had seldom made up done so and measured the change of mood by SD method. On the contrary, we had those who had usually made up removed the makeups and measured the influence on mood by the same method. The personalities were examined by MPI(EPQ). The result was that much change of the mood occurred in both cases. The influence on mood by removing makeup was, however, more. Though the difference by personality was also observed, it was not so distinct.

In Study II, we studied the feeling of the adults surrounding the subjects for make-up by research. As the interest in makeup starts to increase in girls' high school students, we studied the feeling of the adults for the making up behaviour of the girls' high school students. In order to clarify the peculiarity of feeling for makeup, we compared it with the feelings for hairstyle and dressing. And in order to see the peculiarity of makeup, we studied the feeling of the persons surrounding the subjects for the makeup of college students and compared it with that for the makeup of the girls' high school students. The result was that the feeling of the adults for the makeup of girls' high school students was considerably peculiar in comparison with that for the makeup of college students and negative to it. The feeling for the makeup of college students becomes positively affirmative, therefore it can be said that this dramatic change is a trait of makeup. However we were unable to investigate the cause of this fact.

1. 緒 言

化粧は美容のために行うといえるが、美しくみせるということは、そうすることによって何らかの効果や影響を持つということであろう。

その心に与える効果は、化粧をしている本人の心に対するものを考えることができる。また一方で、本人の周囲の人達に対するものも考えることができるであろう。

そこで本研究ではこれを二つに分け、研究Iでは化粧をしたり化粧をとったりしたときの本人の意識状態がどのように変化するかを調べた。次に

研究IIでは、化粧をすることに対して周囲の人達の意識を調べることにした。

2. 研究 I

本研究では、化粧をしたりとったりしたときの意識性の変化を調べることにした。まず実験1では、日常化粧をしない人に化粧をしてもらい、その気分の変化を調べ、実験2では逆に日常よく化粧をしている人にその化粧をとってもらって、その気分の変化を調べることにした。

Effects of makeup to one's awareness

Yutaka Haruki

2.1 実験I

目的

化粧の経験のない女性に化粧をほどこし、主観的感情の変化を測定する。そしてこの変化が、単に化粧をしたことのみによるのか、化粧をし、他者からみられる(他者の反応を知る)ことによって生ずるのかを調べることにした。またそのことが本人の性格とどのように関わるかも調べた。

方法

・被験者

化粧の経験がないかほとんど日常化粧をしない18歳～23歳までの女子大学生33名(主として早稲田大学人間科学部学生)

化粧用具および化粧の実施・化粧用具は次のものであった。乳液、収れん性化粧水、ファンデーション(2色)、頬紅(3色)、口紅(6色)、アイシャドウ(12色)、コットン、クレンジングローション、洗顔料。以上の用具を用いて、実験者が本人の雰囲気および服装に合うようにナチュラルメイクをほどこした。なおメイクは乳液、収れん化粧水、ファンデーション、頬紅、アイシャドウ、口紅の順で行った。

・調査用紙

主観的感情(気分)を測定することは大変難しいが、岩下(1979)を参考にして化粧と関係があると思われる形容詞対を33対選び、7段階評定によりチェックしてもらうことにした(SD尺度)。

またパーソナリティ検査としてMPIを用いた。

・手続き

化粧は個室でほどこした。被験者にはまず化粧をする前に現在の感情状態をSD尺度で評定してもらった。次に実験者は被験者に上記の要領で化粧をした。この間はなるべく化粧についての会話はしないようにした。化粧が終了したならば被験者に鏡を見てもらい、その後再びその時の主観的感情の評定をSD尺度で評定を

してもらった。そして、化粧をしたまま一時間ほど校舎内を自由に行動してもらい、化粧室に戻ってもらった。戻ったならば、再びその時の主観的感情評定をSD尺度で評定してもらった。MPI尺度のチェックをもしてもらい、最後に化粧をとって帰ってもらった。

結果

化粧直前(T1)と化粧直後の気分(T2)および一時間後(T3)の気分(意識性)の変化についてみると、形容詞対全体については、図1のようになった。各形容詞について、T1, T2, T3の間で変化したかどうかをみるため検定をしたところ、有意差のあったのは次の通りであった。

(1) 化粧直前(T1)と化粧直後(T2)の間で変化のあったもの

しみじみとした→うきうきした
暗い→明るい
重々しい→軽やかな

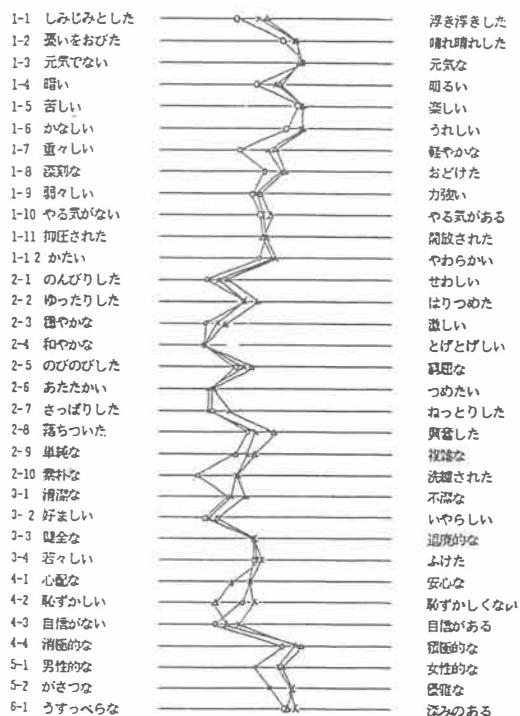


図1 T1, T2, T3別の測定値平均の変化
○-○T1, △-△T2, ×-×T3

深刻な→おどけた
 のんびりした→せわしい
 落ちついた→興奮した
 素朴な→洗練された
 清潔な→不潔な
 男性的な→女性的な
 がさつな→優雅な

(2) 化粧直後(T2)から一時間後(T3)の間で変化のあったもの

ねっとりした→さっぱりした
 心配な→安心な
 恥ずかしい→恥ずかしくない

(3) 化粧直前(T1)と一時間後(T3)の間で変化のあったもの

しみじみとした→うきうきした
 重々しい→軽やかな
 素朴な→洗練された
 自信がない→自信がある
 男性的な→女性的な
 がさつな→優雅な

次にMPI尺度により外向 — 内向のパーソナリティを調べたが、まず外向性のパーソナリティと内向性のパーソナリティで化粧による気分変容に差があるかどうかをみるために、化粧直後と一時間後の結果を比較した。なお、化粧直前については、外向 — 内向で差がなかった。化粧直後については、外向性のパーソナリティの人(12名)の方が、内向性のパーソナリティの人(12名)よりも「おどけた」と「深みのある」という気分になっている。一時間後の結果については、外向性の人の方が内向性の人よりも「うきうきした」、「明るい」、「おどけた」という気分が高かった。

また、外向性の人のみについて、化粧直前(E1)、化粧直後(E2)、一時間後(E3)について気分の変化をみると、有意な変化のあったのは次の通りであった。

(1) 化粧直前から化粧直後への変化

深刻な→おどけた
 男性的な→女性的な

がさつな→優雅な

(2) 化粧直後から一時間後への変化
 有意差のある変化はみられなかった。

(3) 化粧直前から一時間後への変化

悲しい→うれしい
 男性的な→女性的な
 がさつな→優雅な

同様に、内向性の人についてみると次の通りであった。

(1) 化粧直前から化粧直後への変化

暗い→明るい
 やる気がない→やる気がある
 穏やかな→激しい
 落ちついた→興奮した

清潔な→不潔な

深みのある→うすっぺらな

(2) 化粧直後から一時間後への変化

恥ずかしい→恥ずかしくない

(3) 化粧直前から一時間後への変化

素朴な→洗練された
 自信がない→自信がある

考 察

ほとんど化粧をしたことのない女子学生に化粧をさせることによって、ある種の気分に変化が起こることが明らかとなった。一般的に明るく、興奮した傾向になり、女性的な気分になるといえる。このような変化は、化粧直後と他人と接触した後(一時間後)とでは大きな差異がないことから、化粧そのものによって引き起こされるといえる。他人との接触によって新たに引き起こされた気分の変化は、恥ずかしさや心配、自信に関する気分であって、これは化粧することによって生じた不安が他人と接触することによって解消されたと考えられる。

パーソナリティによって、化粧の効果が異なることもわかった。まず外向的なパーソナリティの人に比べて内向的なパーソナリティの人の方が、多様な変化をうけやすいということである。化粧

直後の変化は内向性のほうが多くの気分で変化している。外向的な人は女性的になったといった程度の変化であるが、内向性の人の方が繊細な変化を示しており、明るく、興奮させるという活動的な効果を持っている。また、内向性の方は、他人との接触によっても固有な変化を示しており、恥ずかしいとか自信がないの気分がプラスの方向に変化している。いずれにせよ外向性の人でも内向性の人でも自分がない性格傾向を引き起こす効果を化粧はもっているといえる。

2.2 実験Ⅱ

目的

実験Ⅰでは、化粧の経験のない者に化粧をすることによる気分の変化をみたが、実験Ⅱでは逆に化粧をしている人にそれをとってもらったときどのような変化が見られるかを調べた。このことによって、逆の面から化粧の効果を知ることができることが期待された。

方法

・被験者

日常化粧をしている女子大学生(20~24歳)25名。

・化粧用具

化粧用具は化粧をとるためと実験後の化粧のためのものである。クレンジングローション、コットン、化粧水、乳液。

・検査用紙

化粧による気分の変化の測定は実験Ⅰと同じものであった。パーソナリティ検査はアイゼンクのEPQ(Eysenck Personality Questionnaire)を用いた。

・手続き

化粧を取る手続きは個室で行った。化粧を取る前に化粧をしている顔を鏡で見た上で、その時の主観的感情をSD尺度でチェック(T1)をした。その後自分でクレンジングローションとコットンで化粧を落としてもらった。その顔を

鏡で見てもらい、同様にSD尺度にチェック(T2)をした。そして、その後そのままの顔で自由に校舎内で移動してもらい(約30分間)、再び個室にもどってもらって鏡を見ながら今の気分について再びSD尺度にチェックしてもらった(T3)。

結果

実験Ⅰと同様に、3個のSD尺度の間で、有意に変化のあったものの形容詞対のリストを上げると以下の通りであった。

(1) 化粧をとる直前(T1)と化粧をとった直後(T2)の間で変化のあったもの

明るい→暗い
積極的な→消極的な
元気な→元気でない
自信がある→自信がない
うれしい→かなしい
安心な→心配な
恥ずかしくない→恥ずかしい
力強い→弱々しい
やる気がある→やる気がない
優雅な→がさつな
楽しい→苦しい
うきうきした→しみじみした
洗練された→素朴な
女性的な→男性的な
ねっとりした→さっぱりした
せわしい→のんびりした
激しい→穏やかな

(2) 化粧をとった直後(T2)から30分後(T3)の間で変化のあったもの

いずれの形容詞についても差がなかった。

(3) 化粧をとる直前(T1)と30分後(T3)の間で変化のあったもの

積極的な→消極的な
元気な→元気でない
自信がある→自信がない
うれしい→かなしい

恥ずかしくない→恥ずかしい
 やる気がある→やる気がない
 優雅な→がさつな
 うきうきした→しみじみした
 洗練された→素朴な
 女性的な→男性的な
 せわしい→のんびりした
 明るい→暗い
 安心な→心配な
 楽しい→苦しい
 ねっとりした→さっぱりした

次にEPQ尺度により外向性のパーソナリティ(14名)と内向性のパーソナリティ(11名)に分け、パーソナリティによって化粧除去の効果に差がみられるかどうか調べた。

外向性パーソナリティの人達については以下の通りであった。

(1) 化粧除去直前と直後に有意な変化のあったもの

明るい→暗い
 積極的な→消極的な
 元気な→元気でない
 安心な→心配な
 恥ずかしくない→恥ずかしい
 やる気がある→やる気がない
 優雅な→がさつな
 うきうきした→しみじみした
 洗練された→素朴な
 女性的な→男性的な
 ねっとりした→さっぱりした
 自信がある→自信がない
 うれしい→かなしい
 力強い→弱々しい
 せわしい→のんびりした
 深みのある→うすっぺらな

(2) 化粧除去直後から30分後の間で有意な変化のあったもの

いずれの形容詞についても差がなかった。

(3) 化粧除去直前と30分後の間で有意な変化の

あったもの

やる気がある→やる気がない
 洗練された→素朴な
 女性的な→男性的な
 積極的な→消極的な
 恥ずかしくない→恥ずかしい
 優雅な→がさつな
 せわしい→のんびりした
 深みのある→うすっぺらな

内向性パーソナリティの人達の化粧除去の効果は以下の通りであった。

(1) 化粧除去直前と直後に有意な変化のあったもの

積極的な→消極的な
 うきうきした→しみじみした
 洗練された→素朴な
 明るい→暗い
 元気な→元気でない
 自信がある→自信がない
 うれしい→かなしい
 恥ずかしくない→恥ずかしい
 力強い→弱々しい
 やる気がある→やる気がない
 優雅な→がさつな
 楽しい→苦しい

(2) 化粧除去直後から30分後の間で有意な変化のあったもの

いずれの形容詞についても差がなかった。

(3) 化粧除去直前と30分後の間で有意な変化のあったもの

積極的な→消極的な
 うきうきした→しみじみした
 洗練された→素朴な
 明るい→暗い
 自信がある→自信がない
 うれしい→かなしい
 恥ずかしくない→恥ずかしい
 やる気がある→やる気がない
 楽しい→苦しい

EPQでは情緒安定 — 不安定の次元がある。このパーソナリティの次元について化粧除去の気分及ぼす影響を分析した。有意な変化のあったものは以下の通りである。

情緒不安定な人達(13名)については以下の通りであった。

(1) 化粧除去直前と直後に有意な変化のあったもの

明るい→暗い
積極的な→消極的な
やる気がある→やる気がない
優雅な→がさつな
うきうきした→しみじみした
洗練された→素朴な
女性的な→男性的な
ねっとりした→さっぱりした
元気な→元気でない
自信がある→自信がない
うれしい→かなしい
恥ずかしくない→恥ずかしい
楽しい→苦しい
せわしい→のんびりした
単純な→複雑な

(2) 化粧除去直後から30分後の間で有意な変化のあったもの

いずれの形容詞についても差がなかった。

(3) 化粧除去直前と30分後の間で有意な変化のあったもの

積極的な→消極的な
やる気がある→やる気がない
優雅な→がさつな
楽しい→苦しい
うきうきした→しみじみした
洗練された→素朴な
女性的な→男性的な
うれしい→かなしい
恥ずかしくない→恥ずかしい
せわしい→のんびりした

情緒安定のパーソナリティの人達(12名)につい

ては以下の通りであった。

(1) 化粧除去直前と直後に有意な変化のあったもの

元気な→元気でない
自信がある→自信がない
恥ずかしくない→恥ずかしい
力強い→弱々しい
洗練された→素朴な
積極的な→消極的な
安心な→心配な
やる気がある→やる気がない
うきうきした→しみじみした

(2) 化粧除去直後から30分後の間で有意な変化のあったもの

いずれの形容詞についても差がなかった。

(3) 化粧除去直前と30分後の間で有意な変化のあったもの

恥ずかしくない→恥ずかしい
洗練された→素朴な
積極的な→消極的な
やる気がある→やる気がない

考 察

化粧除去直前と直後の間に多くの形容詞対(全体の約半分)についての気分の変化がみられた。このことから化粧に慣れていると素颜に対してやや否定的な感情を持つといえる。また、30分他人と接触してきた後の評価も直後の場合とほぼ変わりではなく同一である。このことは、除去した場合は他人の評価はプラスの方向に働かないといえる。ただし、30分間に被験者が他人と接触した状況は様々なので、決定的なことはいえない。

次にパーソナリティとの関係であるが、外向 — 内向の次元についてみると、外向性の人は化粧除去直前と直後の間に多くの感情の変化がみられる。これは全体の変化と同じであり、全体の変化はほぼ外向性の人の結果が影響しているといえる。30分間の他人との接触によって、自信のなさや、元気の喪失や、心配は除去されているが、あ

まり直後と変化はない。

内向性の人は、外向性の人に比較して化粧除去による気分の変化はやや少ないが、やはり多様な感情の変化を示している。内容も差異はない。また、同様に30分間の他人との接触についても、やや元気のなさが回復した程度であり変化は見られない。これも基本的には外向性の人と変わらないが、陰鬱な気分が後まで残る傾向がみられる。

情緒安定 — 不安定の次元については、外向 — 内向の次元とさほど違った傾向はみられない。情緒不安定の人はやはりかなりの化粧除去による感情の変動が見られ、30分間の対人接触によってもさほど変化は起こらなかったといえるが、自信や元気さについて解消されている部分はある。情緒安定の人達は不安定の人達よりは、化粧除去による感情の変化は少ないが、不安定な人達よりは、気分の陰鬱さの変化はないといえる。また、30分間の対人接触後には、心配や自信の喪失は解消され、不安定な人達よりは気分の変化は回復される傾向があるようにみえる。

総合的考察

研究Ⅰにおいては化粧をつけるのととるのとの両方向から化粧が気分及ぼす影響を調べたのであるが、つけるのと除去することの間には差があるようである。すなわち、つけるよりは除去するほうが気分と与える影響が大きい。つけるほうは、主として明るさの気分に関係しているが、除去のほうはその他に、やる気がない、元気がない、消極的といった動機づけに影響し、心配、自信がない、恥ずかしいといった不安傾向を起こしている。

また、つけるほうは、対人接触によって興奮傾向がおさまるなど多少とも影響を受けているが、除去のほうは全くといっていいほど変化はなく、化粧そのものの影響が気分と反映するといえる。

パーソナリティが及ぼす効果についてみると、尺度が異なるので厳密にいうと比較はできないが、MPI、EPQともアイゼンクの作成したものであり内容的にも基本的な違いはない。その結果は、

全体の結果と同様、外向性についても内向性についても除去のほうをつけるよりも気分と与える影響は大であるといえる。つけるほうは内向性と外向性で、例えば前者のほうは興奮など気分の高揚について外向性と違う効果がみられたが、除去については、両者の間には顕著な差は認められない。やや外向性のほうが影響が大きく出る傾向はみられる。

つけるのと除去とで共に変化のみられたのは次の通りであった。変化の方向は両者で逆である。これらは化粧の本質を示すものといえることができる。

明るい — 暗い

優雅な — がさつな

うきうきした — しみじみとした

洗練された — 素朴な

女性的な — 男性的な

せわしい — のんびりした

化粧は女性的で優雅で洗練された気分をおこし、うきうきした明るい気分を生む。そしてせわしきさの気分がある。これらをよくみてみると、最初の三つは化粧について抱かれている、むしろ観念といえることができる。次の二つは、つけたり除去したりすることによって生ずる直接的な気分であろう。せわしきは日常生活で、外出時に化粧をし、家にいるときにはつけないといった生活習慣からくるものであるように思われる。

3. 研究Ⅱ

目的

今までは化粧をする本人の気分と与える影響について調べてきたが、次に他者から見た化粧について調べる。化粧はする人によってかなり異なった印象を与え、知的な、華やかな、洗練されたなどのポジティブな印象を与えることもあれば、派手な、けばけばしい、いやらしいなどのネガティブな印象を与えることもある。ここでは「高校生の化粧」について、女性がつ印象を調べた。化

粧と対比させるために服装や髪型、素顔についても調査した。また、高校生と比較するために大学生の化粧についても調査を行った。

方 法

・回答者

20代から50代前半の社会人の女性および女子大学生91名を対象に調査を行った。

・調査用紙

調査用紙は三部構成になっており、一部は回答者本人の化粧経験と化粧の好みについて聞いており、20項目ある。二部は高校生のファッションについてで休日に女子高校生が外出するのにふさわしいと思う髪型・化粧・服装についての項目である。髪型については髪型や髪の結び方など12項目についての許容度、化粧については化粧の許容度、化粧の種類別の許容度、化粧機会などについての35項目、服装についてはスカート丈、靴の種類、アクセサリーについて18項目の許容度である。三部は、形容詞群で、「素顔」、「女子大学生の化粧」、「女子高校生の化粧」に関して聞いており、形容詞群それぞれ28項目である。

・手続き

調査場面は、社会人は早稲田大学エクステンションセンターの講義にて行った。講義終了後、受講生に調査用紙を配付し、その場で記入してもらい回収した。その他の社会人は、調査用紙を渡して記入を求め、郵送にて回収した。

学生は学内にて四年生の子女子学生に配付し、その場で記入してもらい回収した。また、他の女子大学生にも調査用紙を渡して記入を求め、郵送にて回収した。

結 果

結果を分析するにあたり、社会人を年齢によって社会人A(35歳～56歳)、社会人B(21歳～34歳)というように分類した。最終的に全回答者は社会人A群(28名)、社会人B群(28名)、学生群(35

名)の三群に分類された。

1. 高校生のファッションについて

女子高校生が休日に外出するときふさわしいファッションについて、髪型、化粧、服装の三つにわけて分析した。

(a) 髪 型

髪型全項目の許容度を図2.1に示す。脱色、染髪に強い抵抗感があり、パーマヘアには多少抵抗感があることがわかる。

また、ロングストレートヘア、セミロングストレートヘア、脱色、染髪に関しては世代間で許容度に差がみられた。

社会人Aの方が社会人Bよりも許容度が低い項目を以下に示す。

ロングストレートヘア

セミロングストレートヘア

社会人Aの方が学生よりも許容度が低い項目を以下に示す。

ロングストレートヘア

セミロングストレートヘア

脱色

染髪

(b) 化 粧

女性が化粧を始めるのに適すると判断された年齢は、18.3歳であった。この結果では世代に

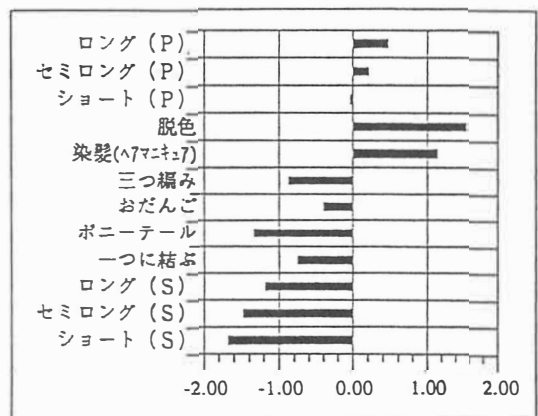


図2.1 髪型全項目の許容度
注：+は非許容，-は許容である

よる差はみられなかった。また、その理由としては高校を卒業し、社会へ出てもおかしくない年齢であることが一番多くあげられていた。その他には、制服には化粧が似合わないこと、素顔でも十分に綺麗であることなどが多くあげられていた。

化粧の許容：女子高校生が化粧をしても良いかという質問に対しての回答の平均値は、7段階評定で3.53であった。世代間での有意な差はみられず、全体的に「やや悪い」という結果となった。

化粧の種類による許容：次に、化粧の項目ごとに許容の程度を調べた。その結果、リップクリーム(無色)、リップクリーム(色つき)、コロンの三項目だけが「良い」方向の回答で、その他の項目は全て「悪い」方向の項目であった。結果を図2.2～2.6に示す。図2.2～2.6は各化粧項目の好みの平均値と合わせて表示しており、この結果から、許容の程度は回答者自身の好みに影響を受けていないように思われる。

また、各化粧品品について色ごとに分析を行ったところ口紅、マスカラ、マニキュアについては色によって有意差が見られた。どの化粧においてもピンク系のものが他の色よりもやや抵抗感が少なかった。口紅とマニキュアに関してはピンク系が赤系、ローズ系、ブラウン系それぞれより有意に抵抗感が少なかった。またマスカラに関しては透明が茶色、青色、紫色よりも有意に抵抗感が少なかった。

化粧機会についての許容：高校生が化粧する機会に関しては、「毎日する」ではかなり「悪い」とする回答が得られ、一方「特別なときのみする」では「良い」方向の回答が得られた。また、「毎日する」では社会人Aの方が学生よりも有意に抵抗感が強く、「特別なときのみする」では社会人Aの方が社会人Bよりも有意に抵抗感が弱かった。

(c) 服装

女子高校生の服装の各項目についての許容度

を図2.7に示す。スカート丈がくるぶしまでという項目とかかとの高い靴の項目とアクセサリーのアンクレットの項目に抵抗感があるが、全体的には許容されている項目が多い。

社会人Aの方が社会人Bよりも靴のローファー、ネックレス、イヤリングについて許容度が有意に低く、社会人Aの方が学生よりもネックレスについて許容度が低かった。ハイヒールに関する二項目についてはかなりの抵抗感がみられた。

2. 化粧に関する形容詞について

「素顔」、「女子大学生の化粧」、「女子高校生の化粧」の三要因についての印象をそれぞれ28項目からなる形容詞群に5段階のSD法で答えてもらい、結果を分析した。その平均値を図2.8～図2.10に示す。

社会人Aの方が社会人Bよりも有意に高かった項目は「女子高校生の化粧」に対する印象のけげばしいであった。

社会人Aの方が学生よりも有意に高かった項目は「素顔」に対する印象の、色っぽい、女っぽい、「女子大学生の化粧」に対する印象の、けげばしい、「女子高校生」に対する印象の、けげばしい、不気味な、であった。

学生の方が社会人Bよりも有意に高かった項目は「女子高校生の化粧」に対する印象の、華やか、であった。さらに、全要因と各要因それぞれについて因子分析を行った。その結果、

全要因については、

因子1 健康的で明るい若々しさ

因子2 いやらしく見苦しく不健康

因子3 大人の女性の華やかさ色っぽさ

女子高校生の化粧については、

因子1 不快でだらしく不自然

因子2 健康で清潔な明るさ

因子3 知的できれいな女っぽさ

女子大学生の化粧については、

因子1 不快でけげばしいいやらしさ

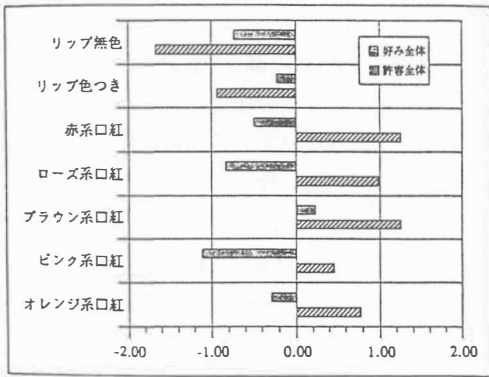


図2.2 化粧品の好みと許容度
注：+は非許容，-は許容である

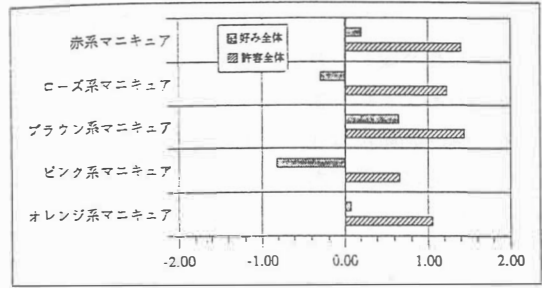


図2.5 化粧品の好みと許容度
注：+は非許容，-は許容である

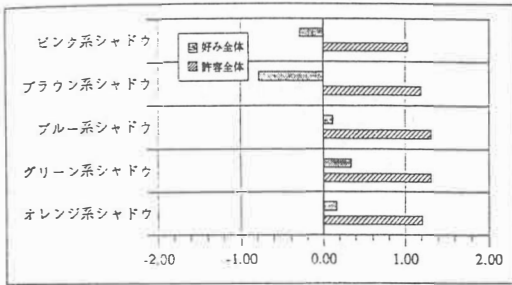


図2.3 化粧品の好みと許容度
注：+は非許容，-は許容である

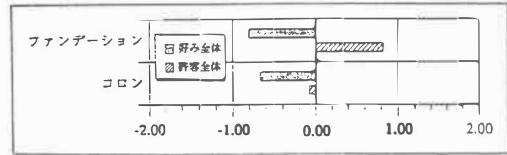


図2.6 化粧品の好みと許容度
注：+は非許容，-は許容である

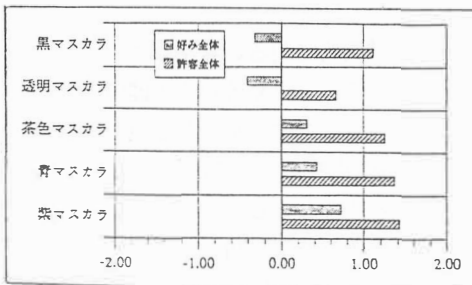


図2.4 化粧品の好みと許容度
注：+は非許容，-は許容である

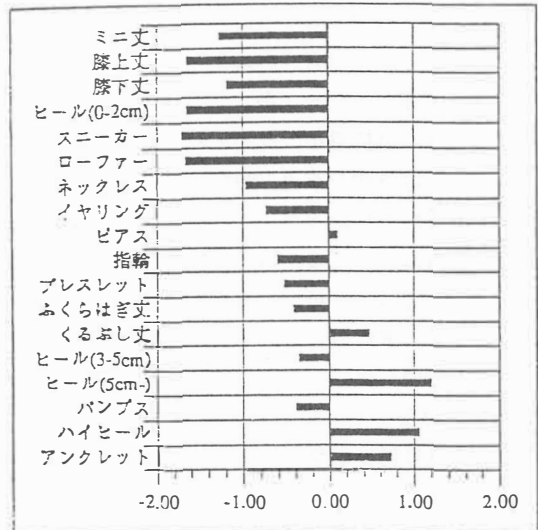


図2.7 服装全項目の許容度
注：+は非許容，-は許容である

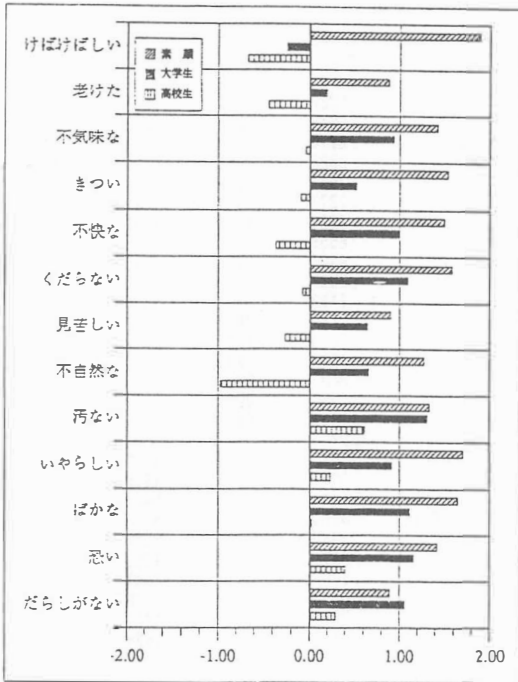


図2.8 形容詞の対象別グラフ
注：+はあてはまる，-はあてはまらない

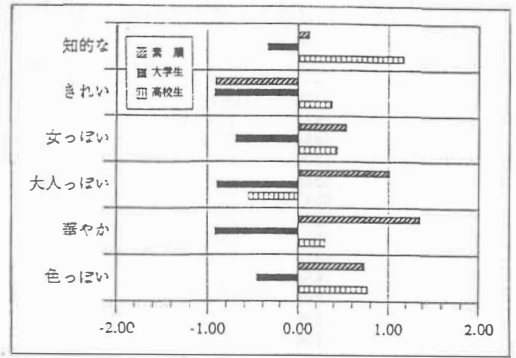


図2.10 形容詞の対象別グラフ
注：+はあてはまる，-はあてはまらない

因子2 知的で上品で健康的
因子3 明るく華やかで若々しい女っぽさ
素顔については、
因子1 不快でけばけばしいいやらしさ
因子2 上品で明るく魅力的な女っぽさ
因子3 だらしなさと大人っぽさ
となった(表1~4)

考 察

女性が化粧を始めるのに適した年齢を18歳前後と答えている人が圧倒的に多い。また、化粧を始める年齢は20年前と現在とでは差がなく、他の項目に比べて化粧の項目は世代の差があまりみられなかった。このことは、女性は世代に関係なく、高校生の化粧に対して同じ認識を持っていることが考えられる。

また、他のファッション、つまり髪型・服装の許容範囲と比較すると、髪型・服装よりも化粧は許容範囲が狭く、不自由であることが示された。

高校生にふさわしい化粧として認められているものはリップクリーム(無色)、リップクリーム(色つき)、コロンのみであった。特にアイシャドウ、透明以外のマスカラは色に関わりなく抵抗感が強く、口紅、マニキュアに関しては赤系、ローズ系、ブラウン系といった落ち着いた感じの色に抵抗感が強く見られた。このことから顔に色をつけることに、より抵抗感があるように見受けられ

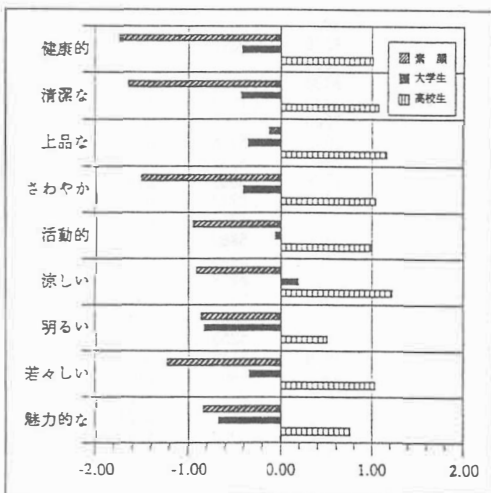


図2.9 形容詞の対象別グラフ
注：+はあてはまる，-はあてはまらない

表1 全要因における形容詞全体の因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	共通性
健康的	.8725	-.2688	-.0751	.8391
清潔な	.8581	-.3150	-.0116	.8356
上品な	.6494	-.2274	.3661	.6075
不自然な	-.5300	.4313	.0158	.4672
明るい	.6589	-.2081	.3273	.5845
さわやか	.8547	-.3356	.0577	.8165
知的な	.5598	-.2751	.4856	.6248
活動的	.7554	-.2315	.0639	.6283
げばげばしい	-.5414	.4460	.3586	.6206
涼しい	.7659	-.1616	-.0573	.6583
きれいな	.5994	-.2796	.4047	.6013
若々しい	.7899	-.2862	.0605	.7096
魅力的な	.6856	-.2476	.3679	.6667
だらしない	-.1340	.5816	-.1869	.3911
見苦しい	-.2576	.7371	-.1032	.6204
老けた	-.3549	.5897	.1291	.4904
不気味な	-.2926	.8231	-.0535	.7660
きつい	-.2821	.6894	.1804	.5875
汚い	-.1424	.7354	-.1076	.5726
いやらしい	-.2706	.8130	.1289	.7508
ばかな	-.3815	.7874	.0103	.7656
不快な	-.4273	.7720	.0488	.7810
くだらない	-.3916	.7358	-.0611	.6985
恐い	-.1832	.7561	-.0071	.6053
大人っぽい	-.1885	.0834	.7137	.5518
華やか	-.0152	.0761	.8439	.7182
色っぽい	.2367	-.0237	.7382	.6016
女っぽい	.1958	-.0121	.7209	.5882
寄与率(%)	27.4861	25.3915	11.9406	
累積寄与率(%)	27.4861	52.8776	64.8183	

表2 女子高校生の化粧要因における形容詞全体の因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	共通性
不自然な	.4782	-.1441	.0506	.2520
だらしない	.6654	.0201	.0955	.4522
げばげばしい	.4802	-.2451	-.0811	.2972
見苦しい	.8063	-.1990	.1758	.7206
老けた	.5651	-.2559	.2564	.4506
不気味な	.8312	-.1642	-.1502	.7405
きつい	.6535	-.1347	.0695	.4500
汚い	.7408	-.0616	.0561	.5557
いやらしい	.8520	-.1131	-.0057	.7387
ばかな	.7962	-.2121	.0826	.6859
不快な	.7649	-.2422	.1729	.6735
くだらない	.7582	-.1723	.1378	.6235
恐い	.7770	-.1890	-.0288	.6403
健康的	-.2011	.8572	-.1111	.7875
清潔な	-.2487	.8216	-.0809	.7435
上品な	-.1624	.6765	.3236	.5888
明るい	-.1610	.6869	.3268	.6042
さわやか	-.2431	.7802	-.2905	.7323
活動的	-.0407	.6922	-.1845	.5148
涼しい	-.1237	.7394	-.1596	.5874
若々しい	-.0993	.8135	-.1240	.6871
魅力的な	-.1906	.5537	-.5163	.6095
大人っぽい	.0700	.1467	.6300	.4233
知的な	-.2956	.4415	-.4971	.5294
華やか	-.0374	.3180	.7072	.6027
色っぽい	-.1554	.2603	-.7851	.7083
きれいな	-.2187	.4411	-.5430	.5373
女っぽい	-.0282	.1811	.7979	.6703
寄与率(%)	25.3737	21.3289	12.6797	
累積寄与率(%)	25.3737	46.7026	59.3823	

表3 女子大学生の化粧要因における形容詞全体の因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	共通性
げばげばしい	.5282	-.1405	-.0213	.2992
見苦しい	.6946	-.1307	-.3357	.6122
老けた	.6226	-.2572	-.1401	.4734
不気味な	.8823	-.0853	-.0543	.7887
きつい	.7681	-.0120	.0548	.5932
汚い	.7373	-.1838	-.0522	.5801
いやらしい	.8280	-.1974	.1273	.7407
ばかな	.8556	-.2637	.0882	.8094
不快な	.8301	-.0752	-.1819	.7277
くだらない	.7387	-.2032	-.2016	.6276
恐い	.7102	-.0346	-.0436	.5075
健康的	-.1136	.7929	.1348	.6597
清潔な	-.1960	.7732	.2674	.7078
上品な	-.1019	.7835	.2817	.7037
さわやか	-.3037	.5847	.4862	.6706
知的な	-.2285	.6225	.5027	.6924
活動的	-.1344	.6903	.2208	.5433
涼しい	-.2735	.5129	.1534	.3614
不自然な	.2648	.0214	-.4073	.2365
明るい	.0071	.4305	.4899	.4254
大人っぽい	-.0944	.2189	.5452	.3541
だらしない	.4591	.1264	-.5118	.4887
華やか	.2382	.3381	.6087	.5415
色っぽい	.0871	.3058	.7287	.6322
きれいな	-.1962	.3830	.6687	.6324
女っぽい	-.0372	.2728	.7716	.6712
若々しい	-.2611	.4539	.4700	.4951
魅力的な	-.1155	.4015	.6684	.6213
寄与率(%)	24.9729	16.6289	16.2438	
累積寄与率(%)	24.9729	41.6018	57.8456	

表4 素顔要因における形容詞全体の因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	共通性
げばげばしい	.3628	-.1748	-.0885	.1700
老けた	.5118	-.2618	-.3483	.4517
不気味な	.6601	-.2358	-.0082	.4914
きつい	.6343	-.0224	.0091	.4029
汚い	.6357	-.2240	-.0777	.4603
いやらしい	.8270	-.0318	.0541	.6879
ばかな	.7661	-.2037	.0523	.6311
不快な	.8034	-.2189	-.1844	.7274
くだらない	.6346	-.1547	-.1001	.4367
恐い	.7260	-.0139	-.0737	.5327
健康的	-.1043	.5238	-.0176	.2855
清潔な	-.2114	.6732	.0932	.5066
上品な	-.1538	.5002	-.0787	.2814
明るい	-.1452	.6284	.0729	.4213
さわやか	-.2218	.7215	.0546	.5727
知的な	-.0782	.5862	-.1519	.3728
活動的	-.3163	.5945	.0432	.4553
涼しい	-.1380	.4819	.0022	.2513
きれいな	-.1024	.6335	.1523	.4350
女っぽい	.1263	.3492	.1245	.1534
若々しい	-.3310	.5259	-.0117	.3863
魅力的な	-.1829	.6140	-.0846	.4176
不自然な	.1900	-.2865	-.4499	.3206
大人っぽい	-.1556	.2675	-.5401	.3874
だらしない	.3971	-.2820	.5126	.4999
華やか	.0350	.3006	-.4283	.2750
色っぽい	.1667	.2125	-.6106	.4316
見苦しい	.4255	-.2262	-.5048	.4871
寄与率(%)	19.0761	16.9247	6.6172	
累積寄与率(%)	19.0761	36.0008	42.6180	

た。特に目の周辺の化粧は、完璧な化粧をしているように感じられるためか特に抵抗感が強かった。女子高校生の化粧に非許容の回答をした理由の一つに、若いうちは素顔がきれいだから余計なことはしなくてもよい、というものがあつた。それゆえに化粧をすることによって素顔のイメージから離れてしまうことがより抵抗感を強くしているのであろう。

非許容の位置にありながらもピンク系、オレンジ系の口紅、マニキュアは他の項目に比べると明らかに抵抗感が弱い。これらの色は暖色系に属し、オレンジは温かさ、家庭的、陽気な、元気等のイメージがあり、ピンクは女性らしさ、化粧、幸せ、やわらかさ等の、どちらかといえば女子高校生にふさわしいと考えられるイメージがある。また、同じ暖色系でも赤系は代表的なセクシーカラーであるので女子高校生の化粧に関しては抵抗感が強くなっているのであろう。ピンク系に関してはさらに女性の肌の色により近いということで、化粧をしても素顔のイメージからあまり離れないのではないだろうか。この理由により、ピンク系は他の色に比べるとやや抵抗感が弱いと考えられた。

また、「女子高校生の化粧」、「女子大学生の化粧」に対するイメージを比較すると、「女子高校生の化粧」は形容詞による評価の因子分析の結果から、不自然で不快でくだらなく、しかし汚さやいやらしさはないという因子、不健康で魅力的ではなく若々しさが無いという因子、大人ぶっていて知的ではなく背伸びしているという因子が抽出された。それに対し「女子大学生の化粧」からは、多少けばけばしいがいやらしさや不快さはな

いという因子、清潔で活動的でさわやかであるという因子、大人っぽくてしかも若々しく華やかなという因子が抽出された。

高校生と大学生の化粧に関してはほぼ逆の印象が与えられた。しかし、高校生と大学生の化粧に共通しているのは大人っぽさであった。このことから化粧によって人は大人っぽくなるとみられていることがわかる。しかし、「大人っぽい」という同じ因子について高校生では否定的な結果が現れており、高校生では化粧が良い意味では受け取られていないことがわかる。これは、化粧は「大人」のものという印象が強く、高校生ではその年齢に達していないからだと考えられる。化粧の許容年齢についての質問に、高校を卒業して社会的に「大人」として認められる年齢がふさわしいと答えた人が多いことから化粧は「大人」のものという印象が強いことがうかがわれる。

一方大学生の化粧については、18歳以上であるためかやや肯定的に捉えられている。大学生は化粧をすることによって、知的さ、上品さ、活動的であり華やかになる、といった肯定的な要素と社会的に認められるための必要条件があてはまることが示されている。

就職して会社に入っても全く化粧をしないことはある意味で礼儀に欠け、社交的ではないとみなされる。しかし化粧の仕方によっては水商売の女性のような印象を人に与えることになる。このように化粧は社会的なイメージと性的なイメージとを持ち合わせている。今回の調査結果からは社会的なイメージが強く出ているように思われる。